新市町村の横顔

猿島郡
三和村

山高村長

1. 沿　革

本村は県の西部に位し、東は結城郡八千代村、西は総和村、南は境町、北は結城市に接している。東西13.51km、南北21.59kmと南北に長く、面積50.85km²、全地域が標高50m未満で畑地が多く、田3、畑7の割合で山林700ヘクタールがその間に点在する。

昭和30年2月11日、旧幸島村八俣村、名崎村が円満に対等合併し、三カ村が融和提携して新村を建設する意味において三和村と名付け、呼名を「みわ村」とした。村の中央を南北に東仁連川が流れ西端を南北に大川が流れる。交通路としては鉄道路線がないが、バス路線が発達し、古河土浦間を国鉄バス、古河下館間、境結城間、古河岩井間、栗橋下妻間を東武バスが走る。水戸線結城駅で下車し、境行のバスに乗ると約30分で大字諸川に着く。ここは商業的市街地を形成しており、現在役場庁舎がある。この庁舎は大正15年に建てられたそうで、当時大火があつたところから、石造り二階建のおよそ現代からは程遠いもので、訪れた日が台風16号の余波で豪雨の日であつたせいもあろうが、庁舎に入ると薄暗い石倉に入つたようであつた。

今年度予算に1,650万円を計上し2カ年計画で新庁舎の建設が計画されているが、近々敷地も決定され着工の運びとなろう。

2. 産　業

この村の農業の特色をしいて上げるならば、陸稲、小麦、大麦の生産の多いことである。これはこの村に限らず猿島郡の特徴でもあるようだ。昭和33年の実収高は陸稲1,138,350トン（県下市町村別に見て8番目）大麦2,976,053kg（同じく6番目）小麦1,431,713kg(同じく11番目）でいずれも県下有数であるが、この村の1戸当り耕地はせいぜい1ヘクタール強であるから、いくら穫れるといつたところで何時までもこのような品目に頼つていては、農家経済の向上はあり得ないというのが村当局の考え方でもあるようだ。その点この村は意欲的で、養鶏養豚、酪農、マツシユルーム生産組合と、各組合が整備され、いわゆる多角経営に懸命だが、どうも第一次産業の生産品は値の変動がはげしく、収入が安定しないうらみがあるという。

それでも、現在豚のいない農家はない程だし、集乳所は33年に2カ所、34年2カ所と建設され、特殊園芸として促成きうり、とまと、すいかの栽培に力を入れ、果樹栽培組合ではぶどう、桃を試作している。ぶどうは組合員10人約3ヘクタールとまだその緒についたばかりだがマツシユルームは組合員25人位、金額にして約百万円の生産をあげている。

3. 教育文化

村が合併してから真先に手をつけたのが、教育施設の整備である。それはまず統合中学校の建設として始められ、今年その第3期工事として理科系統の校舎2階建1棟と、平屋1棟が完成した。来年度屋内体操場が出来ればすべて完備するわけである。今年の4月から全生徒が新校舎に入り授業を受けている。

本村からの進学は、進学コースが境高校、就業コースが下妻、古河、結城の各高校へ向う。

村の納税成績は常に97%を上回り、4年連続金看板を受けた。国民健康保険は32年度全村実施し、名崎、清水岡に診療所がある。

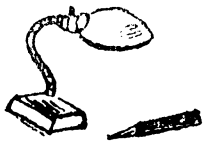
村で珍しい施設としては、海外送信所としての名崎、八俣送信所であろう。名崎送信所は結城と古河の中間、本村の大字尾崎にあり、約60ヘクタールの広さを持ち、八俣送信所は大字山田、東北本線古河駅から16kmの地点にあり、約80ヘクタールの広さを持つ。名崎送信所は昭和9年通話を開始し、国際中継放送も行つている。八俣送信所は昭和15年10月に開設され海外放送も行つたが終戦と共に海外放送は停止となり、対米通話、対米特別放送、国内放送の短波中継所となつた。

昭和34年度一般会計歳入歳出当初予算　（単位円）

歳入	村税	地方交付税	公営企業及び財産収入	分担金及び負担金	使用料及び手数料	国庫支出金	県支出金	寄付金	繰越金	雑収入	村債	合計
	39,039,500	23,000,000	14,130	810,000	380,200	1,818,000	1,240,630	25,300	14,038,690	6,494,620	7,750,000	94,611,070

歳出	議会費	役場費	警察消防費	土木費	教育費	社会労働費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合計
	2,681,300	29,765,690	4,029,580	8,277,200	19,669,900	2,535,640	1,848,010	5,934,270	132,330	234,800	667,900	3,586,250	14,516,300	731,900	94,611,070

東京通信



東京の女性

生井一郎

先日上野の国立博物館に十年に一度しか行われないという正倉院の宝物展を見学に行つたが、まず陳列された宝物よりも見物人の多いのに驚いた。平常なら広い館内も、さすがに今日ばかりは押すな押すなのひしめき合いで、私達の前に女子高校生の一団が入り、その後から私達が入つていつたのであるが、前の高校生達は、年令から見てもさわぎたい年頃かも知れないが、まるでさわいでいるのが楽しみのようで、美術品の鑑賞などどこ吹く風である。またそのように見える程会場は混雑していたのである。私はようやく手すりに寄つて見られるようになつたが、それもつかの間、あつと思う間に後方から圧力が加わり、あえなく列外にはみ出され、しまつたと思つて振返ると、なんと22.3才の女性が涼しそうな顔でいるではないか。勿論この一人の女性が押したのではないにしても、それとなくこの間友人のK君から聞いた話を思い出した。

その話というのは、とに角東京の通勤時の電車、バスはすごいもので、電車なんか、つめ込めるだけつめ込んで定員なんのそのである。それで、ある朝の通勤バスの中での出来事、バスは満員でもう人一人入れないような状態であつた。その中で40になろうかとも思われる紳士が、19そこそこの娘にほつぺたを思いきりぴしやりとやられたそうだ。なぜやられたのか、しばらくわからなかつたが、どうやらバスのゆれた拍子に娘さんのよからぬところにふれてしまつたのかも知れない。それにしてもいい紳士が大衆の面前で自分の子供ぐらいの小娘にぴしやりとやられたのでは面目まるつぶれである。紳士は顔を赤らめて「僕は何もしないのに……」と一人ごとのようにいつていたが、それが真実であるならば我々男性としてまつたく同情するものである。またいかに戦後強くなつたのが女性とナイロンの靴下とは申せあまりにもひど過ぎるように思える。

ここで話はちよつと変つて、統計から見た女性の強さというものを見てみよう。日本人の平均寿命が終戦直後の男47才女50才から、今日の男65才女69.5才と、この14年間に男が18年女が約20年も寿命が延びたということは医学の発達、栄養補給などがよくなつたこと、また終戦直後に算出した平均寿命は戦争による直接、間接の影響が多分にあつたということは別にしても、真に脅威的なものである。そしてさらに注目すべきことは女性が男性よりも約5年近くも長生きするということであろう。人間の寿命は社会的な要因によつてもある程度左右されるということで、インド、セイロン等の後進国では男の寿命が長く、一般に文明国では4年前後女の方が長生きするとのことである。こういうと男性の皆様から、男が命が短いのは、毎日通勤ラツシユの中を職場に出て来て一年中馬車馬のように働いて、もらつた金は皆んな奥さんに渡してしまい、なんで長生きなどするものかと申されるかも知れないが、しかし、奥さんとても安月給を預つて子供のめんどうをみたり、金のやりくりなど、これまたあまり楽なことではなかろう。

さてここで男女の出生比率は女100人に対し男105人ぐらいであるが、男というものは弱いもので、特に1才未満の新生児死亡が女のそれに比べ多く、丁度結婚適令期になるとほとんど同数になる。結婚といえばちよつと余談になるが、今ブームに乗つて日本全国で一日 2,000組ものおめでたがあり、この平均年令はおおよそのところ新郎が27才新婦が24才（都市と農村など地域的に差はあるが）でその差が3才であり、ここで先程の平均寿命を思い合わせると、3＋4の計7年の未亡人になる約束を全国で一日 2,000人もの前途ある女性がしているということになれば、大きな社会問題にもなりかねない。特に最近社会保障制度の確立がさけばれていることでもあるから。でもそんなことは取越苦労であるというのであれば幸いである。

（県統計課主事、現在統計職員養成所に第25期生として入所中）